

よろずは

平成二十九年
三月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです

万葉文化館 おすすめ万葉歌

八千種の

花は移ろふ

常磐なる

松のさ枝を

われは結びな

万葉集 卷二十一—四五〇— 大伴家持

【訳】

さまざまに美しい花はやがて衰えてゆきます。

常緑の松の枝に永遠の願いを込めて、

私はそれを結びましょう。

日本列島には四季があり、折々の花が咲きます。『万葉集』に詠まれた植物に限っても約百七十種類あり、約二千首の歌に詠まれています。もともと多く登場するのは「萩」（約一四〇首）で、次が「梅」（約一二〇首）です。

この歌に詠まれた「松」は、約八〇首あります。色鮮やかな花々は美しいものですが、それらがやがて色あせて散っていくのに対して、常緑樹である松は、一年を通じて色あせません。冬にも濃い緑色であることから、古代の人々は松の枝を結び永続性や長寿を祈ったようです。

若くして処刑された悲劇の皇子・有間皇子も、「磐代の浜松が枝を引き結び真幸くあらばまた還り見む」（巻二—一四一）と、無事を祈って松の枝を結ぶ歌を残しています。松・竹・梅を珍重したり、お正月に門松を立てたりする風習も、こうした古代日本の文化とつながっているようです。

これを読んでくださったあなたの健康と長寿とをお祈りいたします。

【万葉古代学係】

*本号をもって「よろずは」は一旦終了いたします。来年度はリニューアルした内容をお届けする予定です。で、引き続き当ページをよろしくお願い申し上げます。